

[特集] **エキスパートはこう読む！
検査値の臨床的解釈**
日常臨床での疑問にお答えします

[鼎 談] 臨床医が語る「私の検査活用法」
日々の診療で検査結果の“行間”をいかに読むか？

- [Chapter 1] 呼吸器
- [Chapter 2] 循環器
- [Chapter 3] 血液
- [Chapter 4] リウマチ・膠原病
- [Chapter 5] 感染症
- [Chapter 6] 消化器
- [Chapter 7] 神経
- [Chapter 8] 代謝・内分泌
- [Chapter 9] 腎臓
- [Chapter 10] 腫瘍

技術の進歩によって検査の種類が増えることは、ユーザーであるわれわれ臨床家にとっては嬉しいことである。一方で、増え続ける検査を「使いこなせているか」と自問すると、まったくもって怪しいのが現実である。すべての分野において検査の潜在能力を引き出すことができることが理想であるが、専門外の分野となるとなかなか難しい場合もある。検査データは、検査が行われた時点での1次元的な情報であるが、時系列で追っていくと2次元的な情報となり、さらに臨床情報や検査データと組み合わせることで3次元的な情報となって、われわれの前に立体的な姿を現す。診断や治療、経過観察など、必要な場面に応じて検査をうまく使っていくことが求められる。したがって、検体検査においても、検査結果に表示された「数値」そのものだけではなく、その背景に隠れたヒントを読み解いていく必要があるように思う。

検査に関する書籍では、検査そのものの機序や、異常値が起こる疾患や病態、感度・特異度などの解説が主であり、2次元あるいは3次元的な情報を組み立てるための検査の工夫について詳しく書かれているものはそれほど見かけないように感じていた。

専門家の間では半ば常識として共有されているが、専門外の方にあまり知られていない検査の読み方、いわば「玄人のコツ」のようなものに臨床現場でときどき遭遇するが、系統的学習では得られないこうした情報も実臨床では非常に役立つ。エビデンスについてはまだ蓄積中であるために書籍などではみかけないものの、臨床現場の教育あるいは耳学問のような形で伝聞されている内容もあるのではないかと思う。ただし、それらの情報はおそらく玉石混交であり、「真に有用なコツ」を見抜くのは専門外の人間には困難にも思う。ぜひ聞きたい、しかしなかなか聞けない、そのような経験はないだろうか？

以上の経緯から、信頼できる専門家から真に有用な「玄人の検査の読み方のコツ」を伝授していただこう、ということで今回の企画に至った。それぞれの専門領域における百戦錬磨の執筆陣に、専門外の方から質問の多い事項、専門でなくても知っておいてほしいトピックスをQ&A方式でご解説いただいた。答えにくい内容も多かったと思うが、明日から使えるコツをわかりやすくまとめてもらっている。

それでは「玄人のコツ」を存分にお楽しみいただけたら幸いである。

笹原鉄平

(自治医科大学附属病院 感染制御部)